

聖書箇所：ルカの福音書8章49～56節

説教題：泣かなくてもよい

1 あらすじ

会堂管理者であったヤイロには、十二歳になる一人娘がいました。その娘があるとき、重い病気にかかってしまいます。親としてできる限りの手を尽くしました。しかし容態は悪くなるばかり。主治医からは今日明日が山でしょうと告げられてしまいます。ヤイロは、イエスの足元にひれ伏し、娘を助けてくださるようにと願い出ました。

当時、会堂管理者といえは大変高い地位にありましたから、人々が見ている前で誰かに頭を下げてお願いをするようなことはしません。でも今はそんなことはもうどうでもよい。とにかく一刻でも早くイエスに来ていただいと必死に頭を下げます。そんなヤイロを見て、イエスは歩き出します。ヤイロの目に少し希望の光りが見えた瞬間でした。

ところが、そこでまったく予想していなかった出来事が起きてしまいました。十二年間長血をわずらっていた女性がイエスのころものふさに触り、それをきっかけにしてイエスは立ち止まり、まったく動こうとしなくなりました。女性の病は確かにいやされました。それはよかったですか問題がひとつあった。律法によれば、長血をわずらう者は汚れているとみなされていました。汚れた者は他の人にも触れてはなりません。そういう決まりがありました。女性はそのことが公になることを恐れていました。でも、イエスはいつさいこの女性を責めません。かえって、こんな言葉をかけて送り出していきます。

「娘よ。あなたの信仰があなたを直したので。安心して行きなさい。」

2 お嬢さんはなくなりました

そんなやり取りを脇で見ていたヤイロは、「早く前に進んでくれ」と心のなかで叫んでいたでしょう。できるなら無理矢理にでもイエスの服を引っ張って連れていきたくったでしょう。でもそうはできません。このままでは間に合わないかもしれない。まだかまだかと気持ちばかりが焦ります。ヤイロの心配は残念ながら的中してしまいます。家から使いの者が来て、「あなたのお嬢さんはなくなりました」と告げられます。ヤイロは大事な一人娘を亡くしてしまいました。

子供を亡くした親という時、私はいつも叔父のことを思い起こします。叔父には息子ひとりと娘ひとり、ふたりの子どもがおりました。そのひとり息子が今からおよそ三十年前の夏に海で溺れて亡くなるという事故が起きました。当時二十代の後半で、さあこれからというときでした。葬儀が終わったときだったでしょうか、叔父がぼつりと漏らした言葉が忘れられません。「まるで自分の腕がもがれてしまったようだ。」いまでも叔父の家に行くと、仏壇には亡くなった息子の思い出の品々が置かれています。何年経とうとも、叔父の心のなかには、いえることのない悲しみがあるのだと思われました。

時代が変わろうとも、国や言葉の違いはあっても、子供を亡くした親の悲しみの深さ

に違いはありません。「あなたのお嬢さんはなくなりました。」その言葉を聞いた瞬間、ヤイロは自分を支えることができず、そのばに崩れ落ち、大声を上げ泣き出したのだらうと思います。

3 恐れなくて信じなさい

(1) ヤイロの信仰

イエスはそんなヤイロをご覧になり、こうお語りになります。「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」

ここに「ただ信じなさい」とあります。ヤイロにはどんな信仰があったのでしょうか。「イエスは神の子、救い主」とは思っていない。娘が死にかけているので、そこで切羽詰まってイエスの所に駆け込んだ。ただそれだけ。困ったときの神頼みと言われればそのとおり。それがヤイロの信仰でした。信仰と呼ぶのはどうかと思うようなレベルでした。

そんなヤイロが「恐れず、信じなさい」と言われて、すぐに信じられたのかどうか。皆さんはどう考えるでしょうか。ある方は言うでしょう。「ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」イエスは、信仰が先で、その次に娘が直るといふ順番が大切だと言っておられる。娘が生きかえったのだから、ヤイロは本当に信じたということではないか。もしヤイロが信じなかったのなら、娘も生きかえらなかつたに違いない。

果たしてそうでしょうか。56 節を読んでください。死んでいた娘が起き上がったのを見て、両親はどうしたとありますか。「ひどく驚いた」とあります。驚いたのは、予想もしていなかつたことが起きたからです。もし心の底から信じていたのなら、そんなに驚くことはありません。ということは、ヤイロは

信じていなかったのです。だから腰を抜かすほど驚いてしまいました。

もし自分がヤイロだったらどうでしょう。「ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」普段何もないうちでも、信じなさいと言われもなかなか難しい。普段でさえ難しいのに、ここでは子どもが死んだのです。どんなすばらしい信仰をもっているにも動揺します。混乱します。泣き叫びます。そんなときに、「もっと冷静になれ。そして信じなさい。」そんなことを言われても、無理というものではないですか。

(2) 怒り

ヤイロが信じることを難しくしている事情がもうひとつあります。彼は最後の望みをイエスに託しました。イエスはヤイロの願いを聞き、家に向かい始めました。そこまでは順調でした。ところが途中でイエスは立ち止まってしまったのです。長血わずらいの女性のことにばかり心を奪われ、ヤイロの娘のことなど忘れてしまったかのようなふるまいをされました。もしあのときイエスが立ち止まらず、そのまま前に進んでくれたのなら間に合ったかもしれない。娘は直ったかもしれない。そう考えると、ヤイロの心の中にむらむらとイエスに対する怒りが湧いてきます。イエスが一生懸命がんばってくれて、その結果娘は助からなかつたというのなら自分なりに納得できます。でも、イエスは一生懸命努力してくれなかつた。ヤイロの目にはそう見えてしょうがありません。娘が死んだのはイエスのせいだ。そう言いたくなります。娘の死をすぐに受け入れることができず、その代わりに怒りをイエスにぶつけていったのだらうと思います。

4 娘は直ります

(1) からし種の信仰から実を結ばせる方

ここでひとつの矛盾にぶつかります。イエスは言いました。「ただ信じなさい。そうすれば、娘は直ります。」しかし事実はどうでしたか。今見たとおり、ヤイロは信じられませんでした。けれども娘は死からよみがえり、直った。これはいったいどういうことでしょうか。

みなさんは、死んだ者がよみがえるということをごどこまで信じておられるでしょうか。心の底から信じて疑わない方は幸いです。しかし、多くの方はそうではない。どこかで疑っている。あるいは確信がない。グレーゾーンではっきりしない。そんな方が結構いるのではないかと思います。はっきりとした確信がないのですから、中途半端といわれればそのとおり。

しかし、確信がないという方はどうか気落ちしないでいただきたい。恥ずかしく思う必要はありません。ヤイロのことを見てください。彼は信じろと言われても信じられなかった。むしろイエスに対して腹を立てていた。それなのに娘は直りました。

イエスはどんなお方ということでしょうか。私たちは、信仰というたとえ岩のように堅い揺るがない信仰こそ大切であると考えています。確かにそのとおりです。しかしイエスはもっと広く考えてくださっている。

ヤイロは何をしたか。イエスのところに行き、恥を忍んで、娘を直してくれとほんとうにシンプルに訴えた、ただそれだけ。ただそれだけなのに、イエスはヤイロの中にすばらしい信仰があると見てくださった。

娘がよみがえるなんて確信はありませんで

した。でも、イエスはヤイロの中にあるからし種のような小さな信仰を、豊かに大きなものとしてくださった。イエスとはそのような方なのです。

(2) 泣かなくてもよい

信じろと言われても、信じることのなかなかできないのが私たちです。泣かなくてもよいと言われても、泣いてしまいます。恐れるなどと言われても恐れてしまいます。どこを見ても信仰と呼べるようなものはほとんどありません。

でも、イエスはそんな私たちであっても十分だと言ってくださいます。からし種のような、困ったときの神頼みのような、そんないい加減に見える信仰であってもよい。助けてくれと言う者はもちろん、怒りをぶつけるためにイエスのところに来る者さえ、心から喜んで迎えてくださる。文句ひとつ言わず、一緒にヤイロの家に向かいます。

ときにはイエスの足取りは遅いように感じられることがあるかもしれません。突然立ち止まってしまい、前に進まないように思えていらいらするかもしれない。もう間に合わない。手遅れだ。そんなふうに見えるときもあるでしょう。

イエスにとって手遅れということはひとつもありません。たとえ子どもが死んでも、愛する者が死んでしまっても、イエスは死の中から取り戻してくださいます。どのようにしてでしょう。ご自分の命を十字架で投げ打ってです。

信じることの難しい私たちに、今朝イエスは「泣かなくてもよい」と声をかけてくださり、励ましてくださいます。